

戦争が遺したものの

鶴見 俊輔、上野 千鶴子、小熊 英二著

つるみ・しゅんすけ 1922年生まれ。哲学者。
うえの・ちづこ 1948年生まれ。東大大学院人文社会系研究科教授。
おくま・えいじ 1962年生まれ。慶応大総合政策学部助教授。

副題「戦後世代が聞く」に誘われて、ふと年齢を確認した。五十五歳（上野千鶴子）と四十一歳（小熊英二）の二人が八十一歳のひと（鶴見俊輔）に話を聞いたインタビュー集である。戦後世代に「聞いておきたいこと」があり、戦争体験を持つ者に「語り遺しておきたいこと」があっても、それがこんなに直截かつ濃密な形で実現するのは稀有なことだ、まずはそのことに瞠目しないではいられない。

「聞いておきたいこと」の中でも注目されるのは、鶴見の戦争体験の

負の遺産解決への糸口

中心にある従軍慰安所の運営への関与と、九〇年代における「女性のためのアジア平和国民基金」への参加について尋ねた章である。上野は鶴見の国民基金参加が孕む問題を明らかにしながら、心情倫理（結果は思わしくなかったが誠意はあった）と責任倫理（結果的に招き寄せてしまった事態への責任をどうするか）との峻別を迫る。これは当事者が、果たして自らの責任を抉り出して裁き得るかという、戦争責任の核心に触れる大切な論議なのだ、小熊の「まあそのあたりで」という介入で



評・金井 景子

（早稲田大学教授・日本近現代文学）

中断されているのが惜しまれる。そこに冥界へと旅だった「ヤクザの仁義」は、さまざまな矛盾を抱えながら「感じる」（鶴見）盟友たちが、活る、生身の人に直接問いかけ、そとと甦り、彼ら彼女らのしごとの場で応答を求めると——本書が選択した座談という方法の可能性と限界が集約的に現れた局面でもある。

とはいえ、読み進むうちに、鶴見は「従軍慰安婦」問題ばかり、戦争の戦後のしごと——転向研究や「思想の科学」の編集、ベ平連の運動、それら解決のためにわたしたちがひそして近年の著作「アメノウズメ伝」もとき得ることばが実に豊かにある執筆に至るまでが、彼自身の戦争体験との抜きさしならない応答の中で紡ぎ出されていたことが、見事に検証されて行く。そして、多くはすで

（新曜社 二九四〇円）